

グローバリゼーション 研究の先駆者

グローバリゼーションの可能性と危険性をいち早く指摘した
テルアビブ大学のアサフ・ラジン。
その横顔をプラカシュ・ラウンガニが紹介する。

写真:アサフ・ラジンの提供

1958年、イスラエル軍で兵役に就いていた17歳のアサフ・ラジンは、味方の誤爆で危うく命を落としかけた。入院生活は1年に及び、生まれ育ったゴラン高原の共同体「キブツ・シャミール」の畑で肉体労働にいそむ暮らしは難しいことがはっきりした。そこで「現代のグローバル社会が多くの人々に与えているすばらしい機会」に目を向けることにしたという。ラジンの場合、それはシカゴ大学大学院への進学であり、国家がグローバル化の恩恵を最大限引き出す方法を研究する第一人者としての輝かしいキャリアだった。ラジンはテルアビブ大学を本拠としつつ、ストックホルム商科大学のラース・スベンソンの言葉を借りれば、世界中の学術機関が「最も歓迎する訪問者」として活躍してきた。2017年にはイスラエルからEMET賞を授与された。同国が「社会に広範な影響と貢献をもたらす傑出した学術的および職業的成果」に贈る最高の栄誉だ。

「つまり大怪我という不運な出来事が、私の人生を変えてくれたわけだ」とラジンは語る。その言葉には、友人や家族のいう「アサフらしさ」がよく表れている。わが身に起きた悲劇を乗り越え、自らの責務を果たすために断固として前を向く姿勢だ。キブツを支配していたのはマルクス主義で、創設者のひとりであったラジンの父は、ロンドンを訪問するたびにマルクスの墓に参じた。ラジンが重傷を負った後、キブツの長老たちはヘブライ大学で農業を学ぶのがコミュニティに貢献する最善の道だと考えた。しかしラジンは経済学に魅了された。そして恩師からの強い勧めもあり、当時も今も自由市場主義の総本山であるシカゴ大学大学院で学ぶための奨学金を獲得した。

「マルクス主義の共同体から資本主義の牙城であるシカゴへ、さらには学者として数々の成果を残すという驚くべき道を歩み、しかも常に謙虚で、誰に対しても親切だった」。国際通貨基金(IMF)アジア太平洋局の副局長で、自身がシカゴ大学大学院に在籍していた1980年代からラジンを知るジョナサン・オストリーは振り返る。オストリーは同じく現在IMFの副局長であるトム・クルーガーとともに、ラジンの1987年の名著『財政政策と世界経済』(河合正弘監訳、HBJ出版局)の解説書を書いている。変動相場制や資本移動の増加によって急速に変化する世界において『財政政策と世界経済』は国際経済学にかかわる者の必携書となった」とオストリーは語る。各国の政治的選択の関係性は「恐ろしく複雑になりつつあった。今ならコンピュータ・シミュレーションを使って解明するような複雑なチャンネル(経路)を、当時のアサフは明確に理解し、提示していた」。

可能性と危険性

のちにIMFチーフエコノミストとなるジェイコブ・フランケルとの共著であった『財政政策と世界経済』には、ラジンの研究の特徴がはっきりと表れている。そこにはグローバリゼーション、すなわち国際貿易だけでなく、国境を超える資本や労働の移動によって国と国とが結びついた世界の可能性と危険性が示されていた。統合された世界を結ぶチャンネルを追跡するために、ラジンは共著者とともに経済学のさまざまな分野の垣根を超える必要があった。IMFで機関史を担当するアティシユ・ゴシュは、それがラジンらの著作の実務的価値を高めていると指摘する。「政策課題は経済学の特定の分野にうまく収まるものではない。アサフらが10年かけて研究したテーマは、結局その後数十年にわたって注目を集める政策課題となっている」とゴシュは語る。

エルハナン・ヘルプマン(当時はテルアビブ大学、現在はハーバード大学に所属)とは、資本移動が国際貿易のパターンにどのような影響を及ぼすかを研究した。ヘルプマンは1978年の共著『A Theory of International Trade under Uncertainty(『不確実性下の国際貿易理論』、未邦訳)について、ミクロ経済学の一部と考えられていた国際貿易と、マクロ経済学の一部である資本移動という2分野の間の壁を乗り越えようとする初期の試みだったと説明する。「貿易とマクロ経済を別々に検討するのはばかげていた」と語る。同書はこの2つを統合的に研究することで、資本移動が原因で国家間のリスク共有が進み、それが貿易における専門化を助長し、生産性に好ましい影響をもたらすことを明らかにした。ただ専門化が進んだ結果として相互依存性が高まることは、金融危機や主要国の政変によるグローバルシステムの混乱に対して、各国がより脆弱になることも意味した。ラジンはその後も他の研究者とともにこのテーマを掘り下げ、海外直接投資のような一部の資本移動は、「ホットマネー(短期投資資金)」のような資本移動よりも恩恵が大きいとする経済学者の主張を検証した。

1980年代にはフランケルとの共同研究によって、統合された世界ではある国の金融政策と財政政策の選択が、他の国々の政策選択に影響と制約をもたらす可能性があることを明らかにした。今日の専門用語でいう政策の「スピルオーバー(波及効果)」だ。各国の政府は課税や支出の独立性を慎重に守ろうとするが、グローバリゼーションの恩恵を享受するためには、こうした大切な主権の一部を放棄しなければならない。ゴシュは「資本移動の激しい世界では財政政策の協調が必要になることを示したのは、きわめて重要な功

績だ」と語り、このテーマは広範な政策論議にかかわっていると指摘する。実際、欧州連合(EU)は各国の経済が単一の資本市場の下に完全統合された際に適用される財政規則について合意を模索しており、EU加盟国は今まさにこの問題と向き合っている。

経常収支と資本収支

1990年代のラジンは「資本と労働の移動」と「税制と福祉制度」の相互作用を研究した。この研究の多くは、テルアビブ大学の同僚であったエフライム・サドカと行った。資本移動は各国に恩恵をもたらす可能性があるものの、税率を引き下げて外国資本を呼び込もうとすると「底辺への競争」につながることもある。税率を下げれば、政府は社会が必要とする公共サービスを提供できなくなる恐れがある。各国が外国資本を呼び込むために競って税優遇措置を導入し、財源不足に陥るなか、外国資本はどれだけ国民の利益になるのかという疑問が高まり、このテーマに関するラジンの初期の研究が改めて注目されるようになった。

資本移動の恩恵と代償を研究するラジンは、1990年代のIMFにとって貴重な協力者だった。1994年のメキシコの「テキーラ危機」を受けて、他の国々もリスクに直面しているのではないかという懸念が高まった。それまで経済学者は、経常赤字(貿易赤字に近い)が国の所得の5~6%を超えるとといった単純なルールで国家の脆弱性を測っていた。しかし外国資本に依存する国の場合、外国投資家の信頼が続くかぎり、それより高水準の経常赤字を出すことも可能なようだった。

ラジンはこのほどIMF調査局の副局長を退任したジアンマリア・ミレシフェレッティとともに行った研究で、経常赤字の反転がどのようなときに突然起こるかを解明しようとした。調べたのは外貨準備の乏しさ、貿易条件の悪化といった要因だ。ラジンはそれ以前にラース・スベンソンとともに、資本移動がある場合の貿易条件の変化と経常赤字の関係について、ミクロ的条件に関する先駆的研究を行っていた。「私はスタンレー・フィッシャー(当時のIMF筆頭副専務理事)とよく議論した。私の理論研究やジアンマリアの熱心なデータ分析から多くの知見が得られたものの、それでも特定の国がいつ経常収支反転と危機に直面するか予測するのは難しいことを、フィッシャーは理解していた」とラジンは語る。実際1997年~98年にアジア諸国で突然発生した経常収支反転を事前に予測することは困難で、信頼性の

高い早期警報システムを構築しようとする試みは今も成功していない。

ラジンの研究は労働の移動性と福祉制度の関係についても、いち早く警告していた。今まさにアメリカやヨーロッパが直面している問題で、ポピュリストは移民が「福祉のショッピング」、すなわち移り住んだ国の充実した支援制度を悪用していると批判することが多い。

輝かしい成功のなかの悲劇

この輝かしい研究活動と政策課題への熱心な取り組みのさなかに、ラジンは私生活でまたしても悲劇に見舞われていた。息子のオフエアが進行性多発性硬化症との戦いの末に、1996年に30歳の若さで亡くなっていたのだ。オフエアは父譲りの粘り強さで、亡くなる直前にジョージタウン大学に経済学の博士論文を提出していた。知らせを受けてワシントンDCに向かう飛行機の中で、ラジンは「人目を忍んで」泣きどおしたという。

ラジンはオフエアを追悼し、ジョージタウン大学院で経済学を専攻する学生を対象とする最優秀論文賞と連続講義を立ち上げた。ラジン自身と息子のロニー(現在はロンドン・スクール・オブ・エコノミクス教授)のほか、スタンレー・フィッシャー、セシリア・ラウズ、ジェフリー・サックス、ダニ・ロドリック、そしてノーベル賞受賞者のポール・クルーグマンなど錚々たる経済学者が登壇している。クルーグマンは毎年開かれるこのイベントを、ラジンの幅広い信奉者が集まる「家族の集まり」と形容した。

2001年にテルアビブで開かれたラジンの60歳の誕生日を祝う会には、クルーグマンやアン・クルーガー(IMFの元筆頭副専務理事)をはじめ一流の国際経済学者が駆けつけた。賛辞の嵐にたまりかね、ラジンは両親がこの場にいればよかったとジョークを飛ばした。「父はこのあふれんばかりの賛辞を聞いたかっただろうし、母はそれをすべて信じたと思う」。ラジンは引退する気は一切なく、「学期と学期の間にすばらしい休暇」を満喫しているだけだ、と語った。その言葉どおり、ここ20年はコーネル大学の大学院で教えたり(2016年に退職)、研究を継続したり、イスラエルがいかにかグローバル化を巧みに活用してきたかを分析して高く評価された書籍をはじめ複数の著書を発表するなど、非常に精力的に活動している。

ラジンは数十年にわたってイスラエルの経済発展をつぶさに観察し、書き記してきた。2018年には自らの考えを著書『Israel and the World

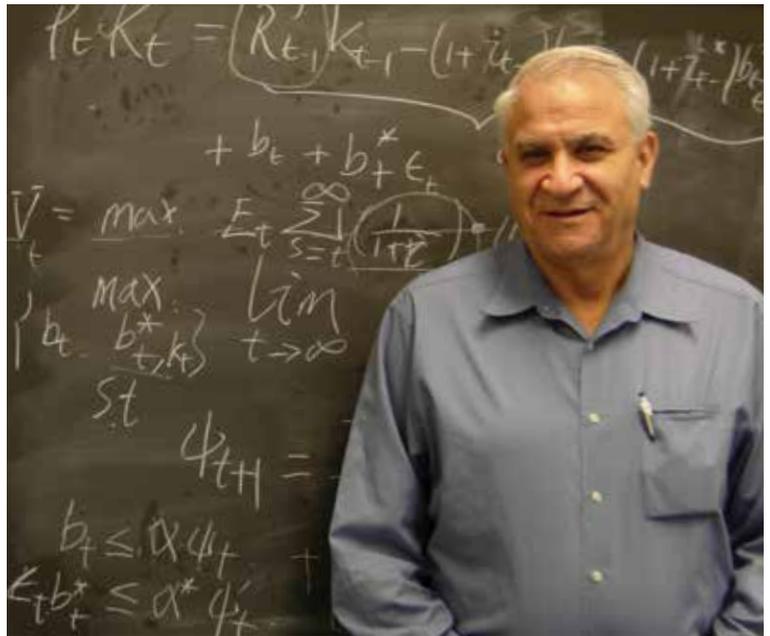
Economy (『イスラエルと世界経済』、未邦訳)』にまとめている。アメリカ連邦議会予算局のトップで、ラジンと共同研究も行ったフィリップ・スワゲルは「他国がグローバル化で問題を抱えるなか、イスラエルが成功してきた理由」を明確に説明している、と同書を高く評価する。他の多くの国と異なり、イスラエルは国外からの大規模な資本流入を成長産業に、すなわちハイテク業界のスタートアップ企業に振り向けることができた。

また1990年代には旧ソ連地域から100万人の移民(イスラエルの人口の約20%)を受け入れ、ハイテク産業と国全体の成長につなげた。ただスワゲルは「ラジンはグローバル化の潜在的危険も率直に認めている」と指摘する。そこには先進国で最も高い水準にある、イスラエル国内の格差拡大も含まれている。

成功の秘訣

ラジンは今年末に80歳になる。いかにもラジンらしいと言うべきか、それに合わせてポピュリズムやパンデミックといった挫折からグローバル化はどう立ち直るべきかを論じる新たな著書を出版する。F&Dとのインタビューで成功の理由を問われたラジンは「すばらしい人々に囲まれるという幸運に恵まれたこと、(中略)そして自分の比較優位性を発見し、そこに特化してきたことだ」と語った。シカゴ時代にはその後ノーベル賞を受賞するミルトン・フリードマンやロバート・マンデルらの薫陶を受け、クラスメートにはルディガー・ドーンブッシュ、さらにはその後IMFのチーフエコノミストとなるフランケルやマイケル・ムッサなど、国際金融分野の未来の大物たちがそろっていた。卒業後、最初に職を得たミネソタ大学では「一流の学者からシカゴでは学べなかった一般均衡を学んだ」と話す。一般均衡とは経済を構成するさまざまなセクターの相互作用の研究であり、ひとつのセクターの作用(部分均衡)だけを研究してはわからないような洞察をもたらすことが多い。ラジンは同じ時期にミネソタ大学で教員を務め、その後「生涯の友として影響を受けることになった」クルーガーから、理論をデータに落とし込むことの重要性を学んだという。

他の仕事もいくつか経験するなかで、ラジンは学問の世界が自分の居場所だと確信し



2009年、教室に立つアサフ・ラジン。

た。テルアビブ大学では管理業務も引き受けることはあったが、「得意分野だと感じたことはない」という。政府の仕事も肌に合わなかった。1979年にはイスラエル財務省の主要ポストに任命された。政府は大盤振る舞いを続けており、それがインフレにつながり、イスラエルはハイパーインフレの瀬戸際にあった。ラジンは政策の流れを逆転させる必要があると公然と警告したため、わずか半年で解任された。「マーティ(マーティン・フェルドシュタイン)がレーガン政権で赤字の危険性を警告して、辞めざるをえなくなったのと同じことだ」とラジンは語る。この政府での短い経験を通じて「学問の道が自分の比較優位だ」と確信した。

政府とは距離を置きつつ、イスラエル情勢については積極的に発言を続けてきた。イスラエルと周辺諸国との和平の可能性について「常に頭を悩ませている」という。「自分が生きている間に平和が訪れることはないが、子供や孫の時代には実現する」と諦観している。だがどれだけ夢想家と思われようと、より良い世界への希望を捨てないことが重要だと説き、幼い孫が書いたという詩の最後の一行を引用した。「ユートピアとは非情な世界に隠された希望である」。

ブラカシュ・ラウングニはIMF独立評価機関(IEO)の室長補である。